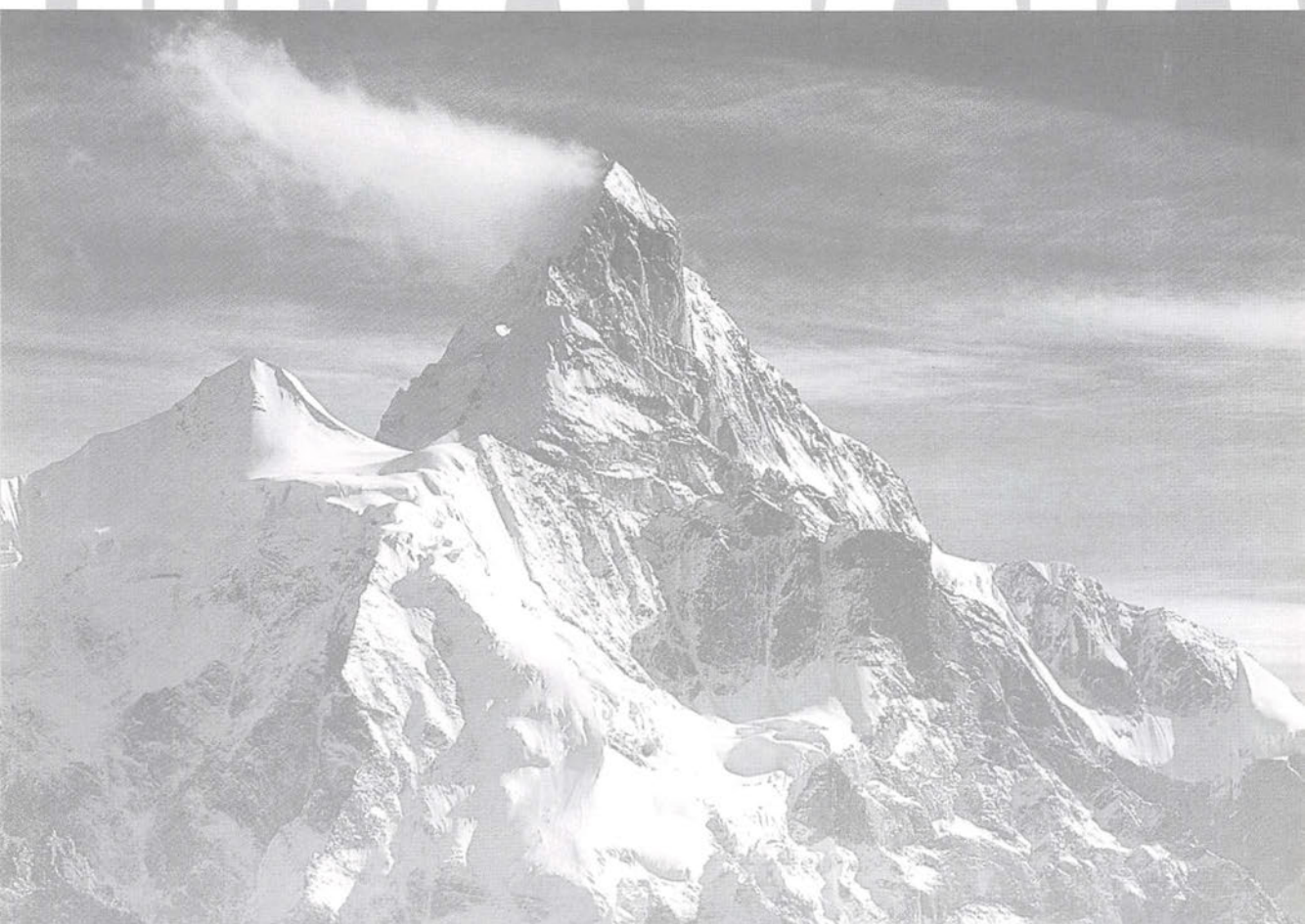


ヒマラヤ

No.387



2004 FEB



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

中国、四川省のスークーニャン(6,250m)は、マッターホルンのような山姿で、クライマーを招いている。まだまだ魅力的なルートが未踏のまま残されている。

(文：山森欣一、写真：山野)

ヒマラヤ No. 387

- | | |
|-------------------------------|--------|
| 1. 追悼 野沢井歩 | 山森欣一 |
| 5. ミンタカ谷・キリック谷再訪の旅 | 同人パハール |
| 17. ロー・マンタンの空、遥かなり(18) | 高橋 照 |
| 22. HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集 | |
| 23. ヒマラヤニュース〈ヒマラヤ・ニュース・トピックス〉 | |
| 24. 事務局日誌 | |

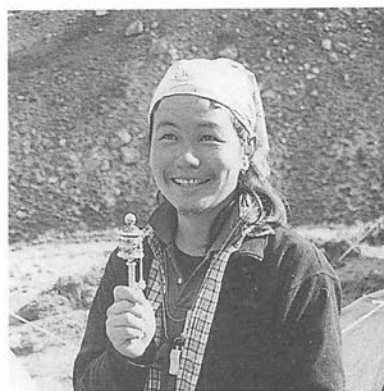
追悼

の ざ わ い あ ゆ み 野 沢 井 歩

1964. 8. 8 ~ 2003.10. 2

(会員番号 2155番)

山森欣一



君は、雪の住処と呼ばれ、高峰の立ち並ぶヒマラヤに魅せられ、いつの日か、インド、ネパール、パキスタン、中国の山を登る日々をおくり、気がつけばまさしくヒマラヤを縦横無尽に駆けめぐり、ヒマラヤだけではなく、ヨーロッパ、アフリカ、南米、北米、東南アジアの白き山河に君の足跡は残りました。

そんな君のヒマラヤへのデビューは、1991年秋、世界第5位のマカルー(8,463m)でした。君自身は八千メートルの高みを越えたものの体調の不良で登頂を断念し生還しましたが、登頂に成功しながらも下山中、疲労のため先輩である石坂工君が凍死するという悲哀も味わったのであります。

そんな君ではありましたが、翌年にはH A Jが派遣したインド、ヌン(7,135m)で初めてヒマラヤの頂きに立ち、頂上でハーモニカを吹いたのでした。

それからは連戦連勝が続きました。1993年にベルニナ山岳会隊で念願の八千メートル峰のダウラギリ I (8,167m)の登頂に成功すると、94年にはバーバリアンクラブの若手を率いて隊長としてネパールのブモ・リ(7,161m)の登頂に成功。95年には再びバーバリアンクラブの隊長としてヒンズー・クシュの名峰ティリッチ・ミール(7,706m)に少人数で挑み登頂に成功し、一躍、日本登山界の脚光を浴びたのであります。

そんな君が、私たちH A Jの仲間となったのは、91年春でした。マカルー登山隊の隊員のほとんどが既にH A Jの登山隊に参加していた縁からでありました。入会後は毎月ルームで開かれる東京集會に参加し、山談義の合間に先輩たちから酒はもとより人生の様々な薫陶を受け、見る見る間に腕

に磨きがかかっていったのであります。

そんな君を私はH A Jの運営の中心になってもらいたくて、96年春に常務理事に就任してもらいました。H A Jでの君の役割は、年三回開催する「ヒマラヤ登山の啓蒙会議」の主催が中心です。その実績を評価されて君は翌97年には東京都山岳連盟の海外委員長に就任し、同時に日本山岳協会の海外登山常任委員としても活躍することとなったのです。

日本を代表する三つの組織のヒマラヤ登山の分野で、様々な啓蒙活動を行う一方で君は、自分が91年から96年までに登ったネパール登山の体験を元に、H A Jの機関誌「ヒマラヤ」に、「ネパール登山の手引き」を連載し、ヒマラヤ登山愛好者に登山実務を知らしめ、やがて一冊の手引書として刊行したのであります。

また、その責任をとって1~2年おきに改定版を発行し好評を得ていました。さらに、昨年のネパール登山規則大改正を受けて、今回の登山から帰国後、改めて全面改定した「ネパール登山の手引き」を発刊する矢先の君の遭難でした。とても悔しかったことでしょう。

97年には八千メートル峰二座を連続して登るという群馬県山岳連盟隊でカラコルムに入りましたが、前年の不幸なことの影響があったためか、この時は君らしくもなく不調で登頂はなりませんでした。

だが、98年にはバーバリアンクラブ隊の隊長として西ネパールのサイバル(7,031m)を新ルートから落とし、翌年夏にはカラコルムのスパンティーク(7,027m)でも全員登頂を成功させ気を吐いたのでした。

99年から2001年は何故かチベット通いが続きましたね。99年秋には私の希望を受け入れてくれて

▼ヌン (7,135m) 1992.8.13 (HAJ) INDIA



それぞれの頂上

▼ブモ・リ (7,161m) 1993.10.22 Nepal



▶ チュルー南東峰(六四〇〇米) N
 ◀ テイリッチ・ミール(七七〇六米) 右 P



▶ スバンティーク(七〇二七米) 左 P
 ◀ サイパル(七〇三二米) ネパール



▲グナ・ラ (6,902m) 1999.10.18 (HAJ) China

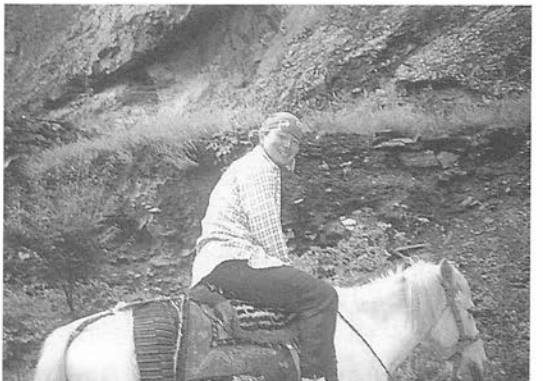


▲ナムナニ(7,694m) 1999.10.25 (HAJ) 右 China



◀ チェマチョンヨン (六四〇〇米) ニ〇〇〇・八・十五 初登頂 (HAJ) 中国

▼ ニンチン・カンサ (7,206m) 2001.8.15 (HAJ) 中国



▲ たまにはこんな姿もあった (2000年チベット)



▶ ガッシャー・ブルムー (八〇六八米) 中
▶ マッキンリー (六一九四米) ニ〇〇三アメリカ
◀ アピ (七二三二米) ニ〇〇一・十・六 登頂

ネパール

チベットの三つの峰に連続して向かいました。初戦のカバン(6,719m)こそクレバスに阻まれ、頂上直下で断念しましたが、グナ・ラ(6,902m)を落としナムナニ(7,694m)に向かいました。ここでは私の15年間の夢であった北面新ルートを岩崎洋、古谷朋之と三人でオンサイトのアルパイン・スタイルで登り、西面にトラバースし縦走を完成させるという素晴らしい登攀を成功させたのでした。

そして、ナムナニ頂上から見た「地上の曼陀羅」冬が訪れる直前のカイルス巡礼の旅に向かいました。そこでは君が一心不乱にコルラする姿を見ましたが、その姿はいつもとは違うように私には見えました。あの時、何を念じていたのか、今はそれを聞く術もありません。

2000年、夏のチベットは大雨に悩まされました。当初の目標の山は、私が1988年に申請して漸く実現した、東チベットの未踏峰・ルオニ(6,610m)でした。しかし、大雨で道路が決壊しターラ・リ峰(6,777m)に転進、私が肺水腫で二週間も現地入院するという二重の災いに耐えながら、君の奮闘努力で六千メートル級の山とはいえ、チェマチョンヨン(6,400m)の初登頂に成功しました。君自身にとっても初登頂は初めての経験となりました。

私がここで学んだのは、君のメンバーに対する優しさでした。主峰に負け戦覚悟でトライして敗退するのではなく、低い峰であっても隊員に登頂を味わってもらい自信をつけて帰ってもらいたいという作戦をとったのでした。

その「相手を思いやる優しさ」は、H A J 登山隊のモットーではありますが、そのことを登山の現場で実践することの難しさを知っている私は、君がこの登山の実践で示した行動に、H A J の進むべき道を教えられた思いでした。

そればかりではありませんが、君の秘められた能力の高さに期待して02年春、君にH A J の後事を託したく専務理事に就任して貰ったのです。まさにこれから君の才能が花開こうとしていた矢先の事故でした。悔やんでも悔やみ切れません。

01年は、夏にH A J の21世紀初めての登頂をチベットのニンチン・カンサ(7,206m)で成功させ、秋にはバーバリアンクラブの仲間と隊長としてマオイストの驚異もある西ネパールの陸路のキャラ

バンを楽しみながら見事にアビ(7,132m)の登頂に成功しました。

02年夏はH A J の最強メンバーと思われる岩崎洋、田辺治、後藤文明と組み、久し振りの八千メートル峰に挑戦、長期間の悪天が続き外国隊も含め全てが撤退した後も粘り切り、好天を掴まえて見事にガッシャーブルム I (8,068m)に全員が登頂しました。しかし、後藤隊員が重度の高山病にかかってしまい、その彼を救出するために見せた君たちの献身的な努力は、山仲間から賞賛されました。

02年はH A J が創立されて35年目に当たりました。それを記念してネパールのムクチナートヘトレッキング隊を派遣しましたが、君はリーダーとして際立った手腕を発揮し、事故もなく楽しくトレッキングを行い、参加した老若男女から絶賛されました。

2000年秋、君は岩崎、鈴木正典とチベットのクーラ・カンリ I (7,538m)に新ルートをアルパイン・スタイルで登るべくザイルのトップに立ちました。しかし、雪崩の危険を察知し登山を断念して下山したのです。その時、トップにいた君はチリ雪崩を三度も受けながら私の元に生還して来ました。それなのに3年後の03年秋、ヒムルン・ヒマール(7,126m)で、相変わらずザイルのトップにいた君が雪崩の襲撃に遭い帰らぬ人となってしまったなんて。あんなに臆病で慎重な君だったのに。

今回の登山をキャンセル出来なかった君の気持ちに分かり過ぎるほど分かるだけに私は今断腸の思いでいます。

トータル獲得標高74,327m は、2003年9月30日現在日本11位。君の前には世界のトップ・クライマー故・山田昇、君の尊敬する尾形好雄、名塚秀二、君の盟友岩崎洋、田辺治などがいます。この記録は君の誇りです。

君も悔しかったことでしょう。今、全国の山仲間が君のいない寂しさを噛み締めています。しかし、これは天命と思い皆必死にその寂しさに耐えようと思っています。

私も君に任せようと思ったH A J でもう少し頑張ってみることにします。君は、そちらにいる山の仲間たちと、酒でも飲み交わしながら、これからも山へ向かう仲間たちを見守っていて下さい。

ミントカ谷・キリック谷再訪の旅

～未踏の5700m峰を目指して～

同人パハール

はじめに

キンヤン・キッシュへの思い絶ち難い飛田と田村の熱意にほだされた寺沢は、肩の痛みに安眠できない日々を送っているというのに、キンヤン・キッシュ西面と東面の再度の偵察のため2002年夏、飛田と二人で4度目のヒスパー行きとなった。また、北海道在住のH A J 会員辻野健治、堤拓哉両名とどこか登りに行くことになった飛田は、偵察との時間的地理的条件もあり、2000年秋我々が訪れたキリック峠近くの5,911m峰に目標を絞った。キンヤン・キッシュの偵察を終えた足で辻野達とフンザで合流することにし、我々は計画を推し進めた。諸事情のため、5,911m峰はあきらめ、飛田・辻野はその並びの5,700m峰に登頂、その後ミントカ谷のジュルジュル氷河へ足を伸ばした。なお、当初我々はこの峰の標高を5,600mとしていたが、その後宮森常雄氏からの情報で5,700mと訂正した。

地名を含む固有名詞表記は、原則として現在の通称を採用したが、違和感のある表記もあるかと思われる。その点ご了承願いたい。また、前回のトレッキングの記録は、「ヒマラヤ」359号並びに「岳人」651号に掲載されているので、併せてご覧いただければ解りやすいかと思う。その後の山座同定で「ヒマラヤ」338号並びに359号2頁の写真の山は6,407m峰ではなく、6,000m前後の峰と判明した。ここに訂正しておく。なお、この地域は制限地域に指定されているので、トレッキングには観光省でのブリーフィングとガイドの同行が義務付けられている。

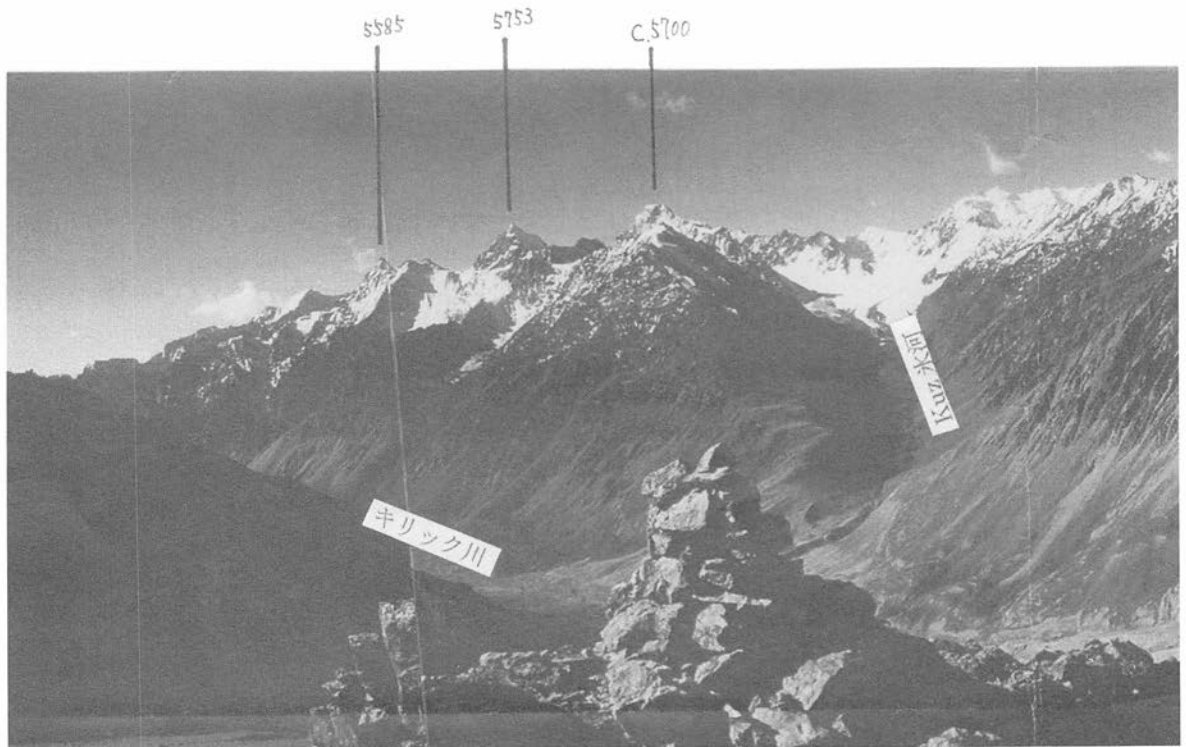
この度、我々の計画性のない二度の山旅の平凡

な記録と写真を元に、宮森常雄氏がこの地域の地図を学術的にまとめて下さった。心から感謝申し上げ、ここに掲載させていただく。

キリック谷へ

9月14日 ブルンバット～フンザ

天候には恵まれなかったが、とりあえずキンヤン・キッシュの偵察を終え、フンザへ。からりと晴れる日が一日も無かった偵察中とは違って変わって、雲一つない快晴。バザールで電話待ちしていると、いきなり日本人に話しかけられる。ご家族と旅行中の日本大使館の某氏であった。「君たちはパキスタンが今危険な状態なのを知っていて旅行しているのか」と随分威圧的な態度。返答に窮していると、何と彼らが連れていたガイドは知人の甥で、流暢な日本語でなつかしように我々に話しかけて来た。彼は某氏に、我々が幾度も北方地域を訪れている登山者であることを説明してくれるが、今度は「遭難騒ぎで迷惑をかけないように」と、とんだおまけがついてきた。辻野、堤両名と合流。堤が休暇の都合でこの先参加できないことを知る。寺沢は肩の調子が思わしくないのでイスラマバードで休養しようと思っていたが、そうも行かなくなり、急遽この先も参加することにする。長谷川メモリアルスクール設立の世話役だったワジッド・ウラー・ベイグ氏に夕食に招待される。気軽にしかけた我々だったが、フンザの各部族の長老やアガ・ハーンプロジェクトの責任者も同席しての晩餐会であった。氏はフンザ王国のいわば家老職直系の家柄で、フンザ古来の建築様式を何とか遺したいと自宅の一角を改造、そのお披露目を兼ねての晩餐会だったようである。分不相応な



得難い体験であった。

9月15日 フンザ

買出しと梱包。堤氏はウルタルBCへ。

9月16日 フンザ〜カラムダルチ

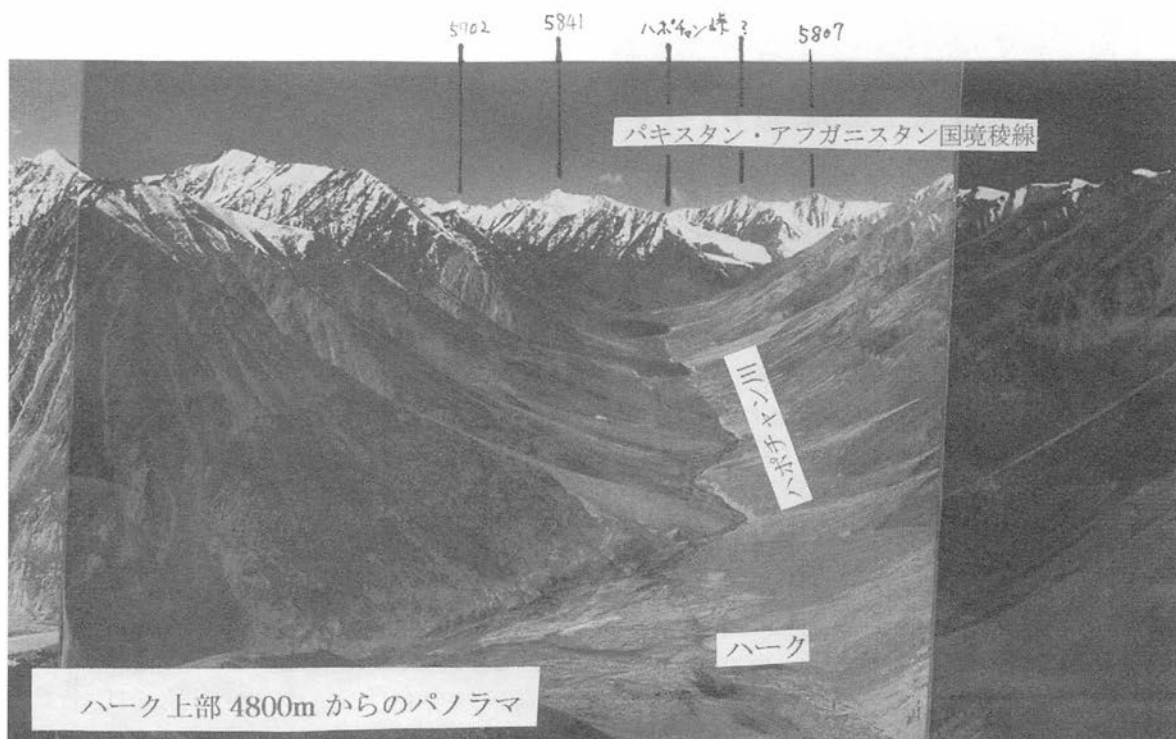
フンザからソストを経由し、ミスガルへ。ソストで堤氏と短期休暇で同行した大使館臨時職員の前田氏は我々と別れ、フンジェラブ峠へ向かう。途中、カラチの病院からの遺体搬送車とその伴走車の列に道を塞がれ、本日はミスガル泊を覚悟するが、幸いにもジープの手配がつき、英領インド最北端の前哨要塞であったケリー・フォートのあるカラムダルチまで入ることが出来た。印パ分離独立後ケリーフォートはパキスタン陸軍の高地訓練基地の一つとなり、現在もアフガニスタンや中国との国境警備施設でもある。ミスガルでは件の死者の葬儀のためにポーターやロバの確保は難しいであろうと思い、我々が設営している間にガイドのシャヒーン・ベイグをミスガルへ戻るジープに同乗させて、明日以降のキャラバンのための手配にミスガルへ行かせる。案の定、手配に大分時間がかかったようだが、何とか明日出発の目処がついた。軍の施設に挨拶に行かせると、我々もお茶に招かれるが、丁重に辞退する。

9月17日 カラムダルチ〜ループジャンガル

青空の下カハンワリ〜アルバーブ・ブル〜ルン・ヘル〜ポート・ヘルと進む。2年前はこのアプローチは天候に恵まれず、周囲の様子もわからないままであったが、今回は谷の様子も判り、二度目ということもあってこの地に親しみが湧いてくる。しかし、前回の訪問時と比較して、たった10日遅いだけで、早くも晩秋の気配が色濃く漂っている。今宵の宿ループジャンガルには、上部から降ろされてきたヤクがおり、本来“主役”の彼らにこちらが気をを使う。豊富に流れていた水も減り、朝晩の冷え込みも厳しい。ポーター兼ロバ使い達は2グループいるらしく、片や協力的、片や荷運び以外には一切協力しない。時期的なものか、前回ほどには魚が捕れず、ちょっと寂しい。

9月18日 ループジャンガル〜シブシェピク

ムルクシでミンタカ谷と分かれ、辻野の高所順応を考慮し、今日はシブシェピクまでとする。気持ちの良い草原のシブシェピクで、石積の囲いを修復してブルーシートを張るグループとテントをよこせというグループとで、ミスガルの住民同士でもめているが、ブルシャスキー語なのでもめごとの内容は我々にはよく理解できない。彼らはしょっ



ちゅう仲間内でもめていたが、その事情は終盤に判明した。2001年に我々からの情報を得てこの地に入谷したある日本人達がけた違いの大判ぶるまいをしており、彼らのグループに雇われた者たちが“リッチな日本人”であるはずの我々が規定料金しか払わないし日本の菓子も配ってくれないケチだと思っていたとのこと。もう一グループには、前回も我々についてミスガルの村人がおり、我々が賃金は規定料金しか払わないし食料の殆どはパキスタン国内で調達したものであること、しかし、負傷者や病人が出た時には隔たり無く処置していることを知っていた。そしてなにより、2000年K2登山時に我々がK2で丁重に遺体処理をしたことや、スキルブルム隊の遺品を回収したことを知っており、それ故我々に余計に好感を抱いてくれた。道々そんな話を村人同士でしていたらしく、道中の後半には非協力的だったグループも笑顔を見せて協力してくれるようになった。このことに限らず、2000年には放牧の村人たちの残すゴミさえ眼につかなかったこの谷で、たった2年の間に随分ゴミが目立つようになった。2年前は、現場でゴミを焼却することさえ躊躇われて我々は殆どの可燃物さえイスラマバードまで持ち帰った

が、何故か罪悪感を覚える。登山もトレッキングも、自分たちさえ順調に行けば良いとすることの悪影響を改めて考えさせられた。

9月19日 シブシェピック〜サドゥブルディ(BC)

シスゲル・バリの草原を抜け、共産中国から逃れる途中力尽きたキルギス人の葬られたグンピーシ(墓所の意)を越える。シリン・メダンの草原でオーレル・スタインを偲び、旧フンザ藩王国国王ガザン・ハーンのボログランド跡を過ぎる。気持ちの良い道を対岸にクズ氷河を見やりながら、ハークを見下ろすサドゥブルディの高台にBC(4,350m)を設営する。仮称ガンズ氷河からの小川が流れる見晴らし台のようなところである。

登山活動

9月20日 偵察並びに順応行動

既に順応している飛田とシャヒーンはあちこち偵察しながら、寺沢と辻野はのんびり順応活動しながら4,800mの丘に登る。西側にはハボチャン峠に連なるアフガニスタン国境の山々、南側には知られざるムルクシ・サール周辺の山々が望める。キリック峠方面にはなだらかな山々…高さより辺境に憧れを抱く者にとっては、真に至福の一時で



▲ガンズ氷河源頭 左奥陰に5,700m峰

ある。5,911m峰はこの周辺で一番目立つし、キリック峠の中国軍監視所から丸見えなので、つい数ヶ月前TV取材中に誤認とはいえ一晩刑務所に入れられてしまったシャヒーンは、異様なほど怯える。仕方ないので、5,911m峰は又の機会に回し、そのそばの5,700m峰に登ることにする。

9月21日 BC～C1 (4,750m) 設営

ポーターに荷揚げを手伝ってもらい、ガンズ氷河末端のモレーンを登り、キリック方面から見えない場所を整地してC1を設営する。おかげで水は下の氷河まで汲みに行かねばならないが、直接氷上ではないので寒さは無い。この氷河に人が入ることは極稀で、ミスガルの村人もよく知らないらしい。後日確認したところでは、確定した名称はなく、ガンズ（氷河の意味）と呼んでいるとのこと。遥か昔、この氷河を越えてミンタカ側へ行った猟師がいるというが、最近は誰も越えたことがないという。ついつい遊び心をくすぐられて、いつかこの氷河を越えてミンタカ峠まで行ってみたいと思ってしまう。BCからC1への砂地や雪の上には、真新しいユキヒョウの足跡がいくつもある。アイベックス達は急な闖入者に驚いている。

9月22日 C1～登頂～C1～BC

肩の上がらぬ寺沢はどうしようか迷ったが、行ける所まで同行することにする。氷河に降りると、スケールは小さいのにとても美しい氷河で、ユキヒョウの足跡があちこちにある。我々の目指す5,700m峰は双耳峰になっており、猫好きの辻野は“白猫の右耳”だとか“左耳”だとか自分なりに名付けて、ニャーニャーと泣くがごとく張り切っている。飛田・シャヒーンそして寺沢・辻野と別れ、飛田組が先行する。快適に高度を稼ぐが、

5,500m付近で寺沢は突然肩に激痛を覚え、下降が心配になった。ここからデボ地点まで下降し、皆の帰りを待つことにする。デボ地点でボーッとしていると、南東の雪の斜面をスノーボールの様な物が転がり落ちてきたのが、途中から登り返していったように見えて不思議に思った。ウトウトしていると、夢現に「グルル」と喉を鳴らす声を聴いたような気がして我にかえる。寄りかかっていた大岩の裏側に、真新しいユキヒョウの足跡がある。先ほどのスノーボールに見えたのはひょっとして…。暑さで雪が腐りかけてきた頃、皆は降りてきたが、この話をしても誰も信じてくれない！一端C1まで戻るが、天候が崩れだしそうな気配なので、後半のことを考えて、疲れてはいるがBCまで下降することにする。

9月23日 BC滞在 ハーク散策

どんよりした曇り空。シャヒーンやポーターに荷下げを依頼し、ハークの線刻岩絵を見に行く。2000年にこの絵を発見？した時には、まだそれほど落書きも無かったのだが、その後ヨーロッパのトレッカーが大挙訪れ、この手の絵を外国人は喜ぶと思った村人たちは、良かれと思ったのかあちこち古い絵の上をなぞったり、新しい絵を描き始めている。ちゃっかりパックジュースまで持ち上げて売ろうとしているのには、驚きを越えて笑ってしまった。かつて日パトラベルの大住恵子氏と、日本人相手にコンコルディアでおでんの屋台を開いたら儲かるだろうね、と冗談を言い合ったことがあったが、皆考えることは一緒なんだと何故か納得してしまった。ニュージーランド人女性トレッカーと彼女のパキスタン人の夫がキリック峠に行くために上ってくる。彼女は2001年春には、ツアー



▲ルンゼ下部を登るシャヒーン(左)と辻野(中間)

でミンタカ峠へ足を伸ばしたそうである。この周辺の調査のために、ナガールの村人と結婚し、現在ギルギットに住んでいるとか。

9月24日 BC～ムルクシ

昨夜からの雪で、周囲はすっかり冬化粧した。山稜上部は雲に覆われているが、今日はムルクシまでなのでのんびり下る。シスゲリ・バリ上部の水河もミンタカ側の水河に繋がっているらしいとのポーターの話に、飛田と辻野がある程度の高さまで登って試みるが、時間切れで戻ってくる。ムルクシへの下降時、近道と称して高台からルートを外れて直接降りようとしたところ、なんとなく気になり周囲を注意深く見て歩くと、そこはかなり古いイスラム教徒の一大墓地であった。陥没して中が覗ける墓もいくつかある。丁寧に手を併せてから、墓地内を通り抜ける。宗派は違えどイスラム教徒のガイドやコックそれにポーター達も、皆神秘的な顔で祈っている。当初この墓地は、かつてこの地ムルクシに入植していたミスガル村の者たちのものと思っていたのだが、後日それ以前に定住していたキルギス人達の墓地と判明した。かつてキルギスタンとフンザ王国がこの地をめぐる領地争いをしてきた時代の片鱗を垣間見たようで、感慨深いものがあった。

ミンタカ谷へ

9月25日 ムルクシ～ミンタカ方面偵察

天候が崩れ出しそうな空だが、ガンズ氷河と繋がっていると思われる氷河の確認に行ってみると、時間の許す限り再度ミンタカ方面に足を伸ばしてみる。流れの縁に張った氷が融けなくなり、水は切るように冷たい。カラコルムの夏はもう終わりだ。周囲の稜線やグルカワジャのコーナー方面は、雪雲に覆われ始める。チャリ・アール対岸のジュルジュル氷河に入ることにする。この氷河の源頭部に、ミンタカ峠から見た6,407m峰が聳えているはずだし、ひょっとしたらこちら側からなら6,407m峰の登路が見出せるかもしれない。また、ミンタカ谷とキリック谷間の上部が確認できるかもしれない。真新しいユキヒョウやアイベックスの足跡を見ながら谷を詰めて行くと、いきなり右岸のルンゼから土石流が発生した。先行して



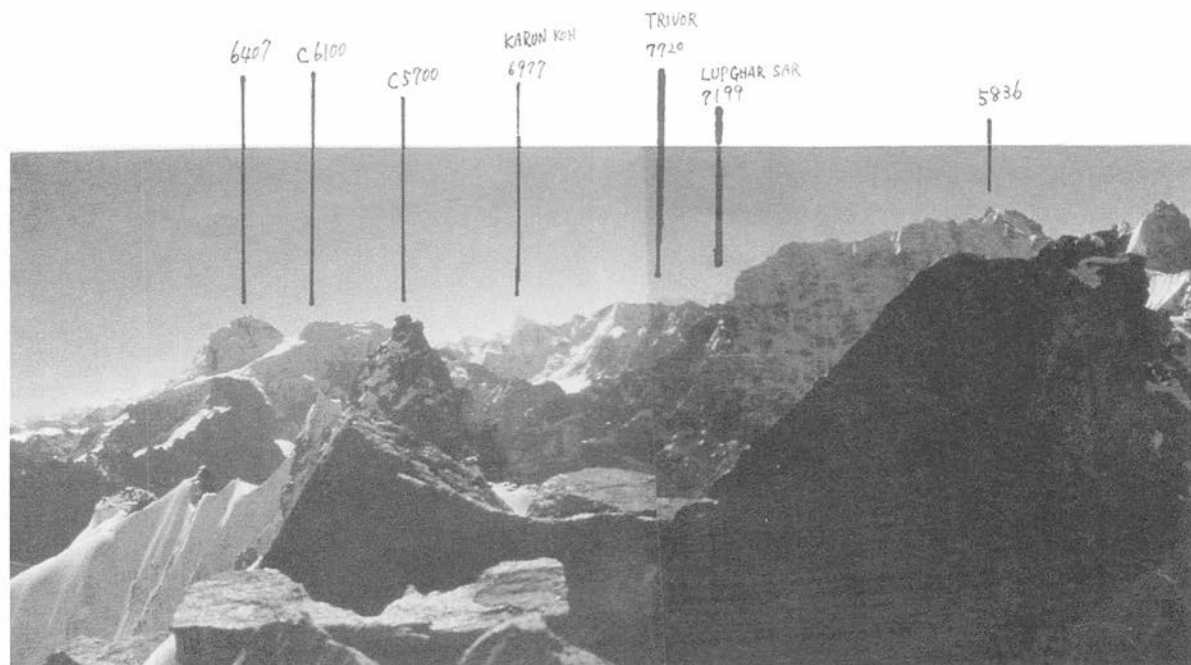
▲5,700m峰

いた飛田は右岸へ、寺沢と辻野それにシャヒーンは左岸へと離れてしまうが、6,407m峰と思しき山がかすかに望めるモレーンの高台で合流する。既に雲が垂れ込め、辛うじて幻のカワジャ峠へと続くらしい谷の方面が望める。6,407m峰へのルートを確かめるためには、もう少し上流へ行かないと無理だ。しかし、段々視界が利かなくなってきたので、曇り混じりの雪の中、ムルクシへと戻る。夜、2001年に入域した件の日本人トレッカーの情報を元に書かれた峠に関する学術発表の英文を読んでいたら、横から覗いていたシャヒーンが内容に意義を申し立てる。彼がムルクシの若いポーターを2人呼び、老ポーターへの質問をいくつか言伝てする。その発表内容は「古来ミンタカ峠はトルキスタンとインド大陸を結ぶ主要な峠と言われてきたが、実際に峠に立った報告では、ミンタカ峠に至るルートは大変険しく、一般的ではない。なだらかなキリック峠こそが主要なルートであった」というものであった。勿論ポーターたちからは強い異議が申し立てられた。

帰路

9月26日 ムルクシ～フンザ

どんよりした空の下、カラムダルチへ。丁度上がってきたトラクターをチャーターしてミスガルへ戻ると、馴染みの運転手が待っていた。冷え切った身体でフンザへ。イスラマバードの日パトラベルへ下山連絡を入れると、かねてから病氣療養中の辻野夫人父君の容態が思わしくないとの連絡が入っている。辻野をギルギットから空路返すべく、飛行機の手配をすることにすると、フンザ～ギルギット間の電話が不調なので、とりあえ



▲ガンズ氷河スノーピーク5,600mからのパノラマ



ザイスラマバードに手配を依頼し、明日ギルギットで予約の再確認をすることにする。

9月27日 フンザ〜ギルギット

まるで日本の秋のように美しい紅葉のフンザを後にする。ギルギットも随分静かになっている。明日の辻野の飛行機を押さえ、来年のキンヤン・キッシュ登山のため、ハーケン類など登山用具を買い出す。シーズン初めと異なり、シーズンオフはかなり安価で購入できるので、我々のような貧

乏隊にはありがたい。

9月28日 ギルギット〜イスラマバード（辻野）

朝一便に辻野を送る。飛行機が飛び立つのを確認してから、丁度地質調査隊を降ろして空になった車を確保し、夜我々もイスラマバードまで直行することにする。

9月29日 〜イスラマバード

心配したカラコルムハイウェイの崩れもなく、今夜帰国の辻野の出発に間に合った。

9月30日〜10月3日 イスラマバード

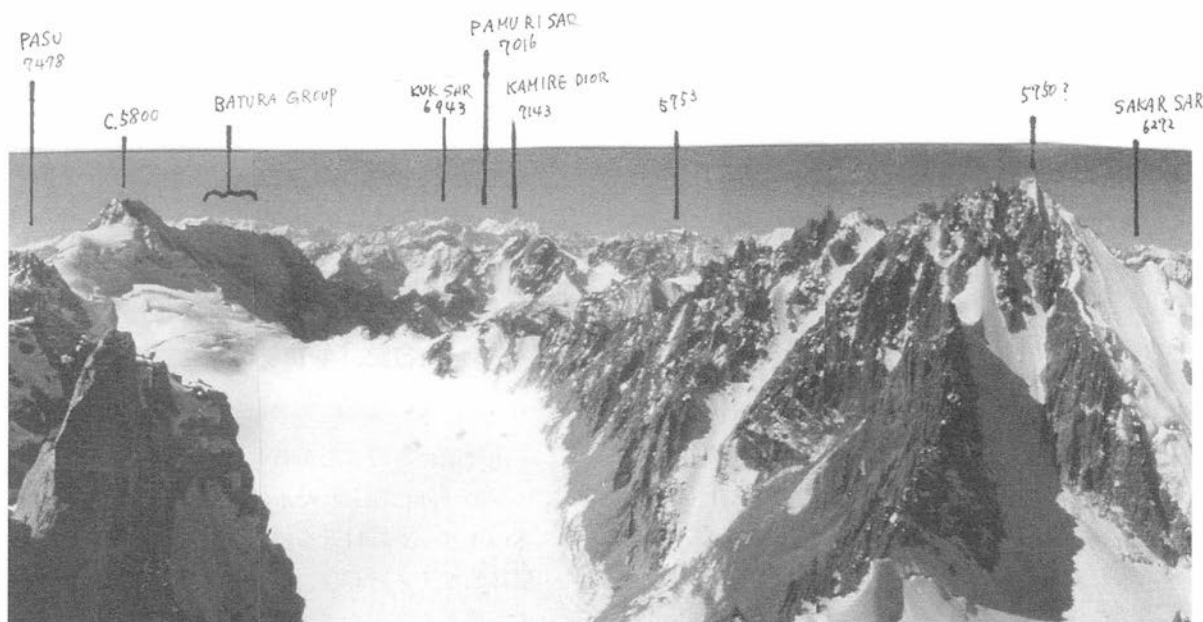
登山用具の整理をし、来年用の装備をデボする。3日イスラマバードを発ち、翌4日帰国。

同人バハール5,911m峰登山隊 '02

隊長（飛田和夫）隊員（寺沢玲子、辻野健治、堤拓哉―ソストまで）ガイド（シャヒーン・ベイグ）コック（ニサル・フセイン）

終わりに

2年ぶり二度目のキリック谷〜ミンタカ谷の旅を終えて、自らは山頂に立つことはなかったものの、おもしろい山旅だった。かつて自分なりにさやかな地域研究にこだわった登山をしていた頃、同じ山域や同じ峰に幾度と通い詰め、通う度にその山域、峰への愛着が湧いたものであった。情熱も行動力もあの頃の自分にはかなわないが、久し



振りにその頃のような充実感を味わった。気の合う同好の志を得られ、そしてこの地を三度訪れる機会あらば、近い将来またこの地域の山旅をしたい。その時には、ユキヒョウが足跡だけではなく、チラリとでもその姿を見せてくれたら、最高に幸せなのだが。

宮森常雄氏が作成して下さった地図を手に、近い将来この地での山旅を実現できる日が来ることを願っている。

(記 寺沢玲子)

5,700m峰登山の記

飛田 和夫

2000年夏、K 2 登山を終えた足で、寺沢、大住それに白沢の3人に混ぜてもらって、永年の憧れの地ミンタカ峠を目指した。世界第2の高峰K 2の高さへの魅力とは違った、未知への魅力あふれる旅であった。1902年に第1次大谷探検隊が中国側からインドへ入域する際に越えたミンタカ峠に立った時には、やはり興奮していたのだろうか、何とも言い難い気持ちの昂揚があった。ムルクシまで一旦戻り、次にそこからキリック峠に立った。峠までは殆ど緩やかな登りで、峠には中国が建立した立派な国境標が立っており、中国側からそこまで何と轍がある。そして下方には軍の警備所までが見えていた。峠から南東方面に頂上部は岩、

下部は雪と岩のとても顕著な三角錐のピークが見える。地図によると標高は5,911m。数人の仲間で楽しく登れそうな山である。

今回辻野に短期間でどこか一緒に登りに行きたいと誘われ、この山を選んだ。

当初の計画では、肩の不調な寺沢はキンヤン・キッシュの偵察を終えたらイスラマバードへ戻り、代わりに辻野と辻野の山仲間であるやはり北海道在住の堤拓哉が合流して、この山に向かう予定であった。しかし、フンザで合流してみると、堤は直前まで頑張ってみたものの職場の都合でどうしても休暇が取れなかったと言う。真っ当な社会人の辛いところでもある。そういう事情で、寺沢がそのまま参加することになった。

9月20日偵察を兼ね、飛田とシャヒーンは寺沢・辻野組より先行して4,800mの岩峰に登る。頂上からはキリック峠から南西に連なる中パそれにパキスタン・アフガニスタン国境稜線、ムルクシ・サール山塊、我々が目標とした5,911m峰から連なる中パ国境稜線からキリック峠へと、360度の展望が楽しめる。シャヒーンは、キリック峠下の中国軍監視所から我々の登山活動が監視され、スパイ容疑を掛けられるのではないかと異様なほど怯え、表情がとても暗い。あまりにビクツク彼の様子に、5,911m峰から南に伸びる尾根上のピークに変更することにした。どちらにしても、5,911m

峰基部の後日ガンズ氷河と呼称した氷河に先ず入り、その氷河を遡ることにする。

寺沢・辻野にBCへ下降してもらい、シャヒーオンとガンズ氷河側に下降し、5,911m峰から伸びる1本の岩稜とアブレーションバレーを遡る。5,911m峰の西側下部付近から氷河上に上がり、窪地になった砂地にC1を設けることにして、一旦BCに戻る。

21日、4名でC1入りし、22日1日で頂上を往復しようと早朝出発する。C1から一旦下降し、氷河の中間付近を登る。シャヒーオンとロープを結び、標識竿を立てながら先行する。氷河は南方面に高度を上げ、ぐるりと岩稜に囲まれている。

傾斜が緩くなり、氷河右岸を遡る。ルートは3本考えられる。1つ目は頂上に直線的に伸びる岩稜から雪稜、2つ目は氷河の正面に見えるコルに出て左上する岩稜、3つ目はコル手前で左に入る氷河の本流。未知の地の、未知のルート選択のおもしろさと難しさだ。

シャヒーオンと交代で膝までのラッセルをしながらルート工作して行く。後下方には、寺沢と辻野の姿がボツンと見える。結局3つ目のルートを選択するが、上部はルンゼとなっている。しかし、このルンゼ上部は、その近くまで遡らないと様子がわからない。稜線直下はルンゼに雪が詰まっている。右手の岩稜の頭上に見える目指すピークらしき下部はボロボロのようだ。寺沢と辻野を待つ間に登攀具を身に付け、不要な荷をデポして登ろうとするが、寺沢は肩の不調で下降が心配だと断念して下で待つことにしたので、3人で頂上に向かうことにする。デブリの上を右手にトラバースし雪面を直上後雪崩の跡が残る右手の氷状にルートを取ると次第にルンゼ状となり稜線に飛び出す。まだ新しいユキヒョウの足跡が出迎えてくれる。遅れている辻野と合流して一緒に登ってくるシャヒーオンを待っている間に、コル右手の小さなスノーピークに立つ。何と360度の展望台だ。南東面には2000年に行ったミンタカ峠方面が見える。今年は大谷探検隊がミンタカ峠越えをしてから丁度百年目だ。天候に恵まれ、まだ一片の雲もわいていない。目にする全ての景色に感動する。下で待つ寺沢にも何とか登って来てもらいたかった。ロー

プをつけるからと引き上げてくれば良かったと後悔してしまう。わずかになったフィルムで慎重にパノラマ写真を撮ってから、コルに降りる。辻野たちがコルに達し、飛田トップで岩稜沿いに1ピッチ強ルートを伸ばし、左の岩峰約5,700mの頂上に立った。頂上は狭く、1人立つのが精一杯なのですぐ辻野と交代する。辻野は頂上で写真を取りまくっていた。

山行記「キリック峠を望む」

辻野 健治

出発前に寺沢さんからもらったオーレル・スタインの「砂に埋もれたホータンの廃墟」のコピー本のキリック峠付近を読んでいる。パキスタンの具体的なイメージは、粗々しい岩山と怒濤の氷河の荒廃した感じがする風景が湧く中、「…ミスガルの微笑むような緑の農地が目を楽しませてくれた。」と言う文章を読みながら、ん～どんな感じかなと勝手に考えて、メンバーの堤くんと、まだ暑く、緊張状態の感じがする、イスラマバードに9月13日に着いた。

同人バハールのキンヤン・キッシュ偵察後に行なう、キリック峠付近の5,911m峰（無名峰）登山に合流するため、ギルギット行きの飛行機に運良く乗り、14日にフンザに着く。

驚いたことに、飛田さんと寺沢さんは、偵察を終えていて、その日のうちに合流出来た。早々に装備の梱包をすませて、16日にKKHをスストへと向かう。ここで日数不足の堤くんと大使館民間協力員の前田さんは、クンジュラブ峠方面へ向かった。

我々は、ミンタカ川沿いにジープで進む。脆い河岸崖を上がりきると、ミンタカ村に着く。収穫を終えた小麦畑が広がる穏やかな村であった。牛を使い脱穀している風景は、のどかであった。この日は車道終点のカラムダルチまで向かう。驚くことに、ここにはヨーロッパ中世の古城のような軍の監視所があった。この辺りは、標高約3,400mある。

17日からキャラバンを始める。ミスガル村から、ロバ3頭を使う。溪谷底の緑地を登って行く。途中のループ・ジャングルでは、マスの1種と思わ

れる川魚を大きな布で捕らえて食べた。

ムルクシには、灌漑用水路あり緑々しいところであった。

ハーク手前（標高約4,135m）の居心地の良い草地にBCを19日に作った。

20日に偵察のため4,800mまで登る。その時、キリック峠からの尾根に中国国境線を示す石標が見えると言う。視力の低い私には、さっぱり見えません。でも、この山は、中国国境上であった……。やむを得ず他の山に変更することとした。

翌21日にBC上流に位置する氷河を詰め、C1を設営し、5,911m峰背後の双耳峰の山に変更しました。

この氷河は、地元では、ガンズ氷河と呼んでいた。どうせなら中国が見える奥の峰が良いかと、感じていたら、飛田さんもそう思ったのか、奥の峰を登ってみようかとなり、22日にC1（標高約4,750m）を出て氷河を詰める。

氷河末端は、以外にスッキリとしていて、クレバスは少なかった。氷河奥に見えるコルを目指す。コル手前で目標の峰へ突き上げるルンゼを登る。中間部に狭窄部があり、この辺りは雪面の傾斜も急になる。

登り切ると岩尾根に出る。不安定な岩稜を50m程岩登りをすると双耳峰の奥の山の山頂に着く。山頂は岩塔で狭く、我々は交互に上に立つ。すぐ向こうに中国が見えると思っていたが、尾根をもう1本隔てて、中国の高原が広がっていた。天気も良く、季節柄草も枯れ荒原した向こうに、雪山がいくつかみえる。ミンタカ峠周辺の偵察も行なう予定なので、早々にBCに戻る。

翌日は、パッキングの合間にハーク周辺にある線刻岩絵を見に行く。ここでしか発見されていないと言われている絵もあり、古代この周辺で狩猟が行なわれていたのかと思うと、チョット感動もありました。ただ、落書きされた線刻岩絵も随所にあり、チョット落胆もした。

24日BCを出る、季節も冬が近いのか、ハポチャン峠側が雲が沸いてきて小雪も舞ってきた。珍しくトレッキングの人と会う。ニュージーランドの女性であった。

ムルクシに戻る途中、ボログランド跡を過ぎ、

キルギス人の墓跡を越えた所、シプシェビク近くで山容確認に北東側を登る。400m程度登ると氷河末端に着く。南西側のチャプルサン川側の山々がよく見えた。ここに拳ほどの大きさの雪ヒョウの肉球跡が点々と付いている。はっとして回りを見回ったりしました。

25日にミンタカ峠側ミンタカ川を登る。放牧用の道が続いていて、3,915m近くの南東面氷河を偵察のため登る。この氷河は、地元では、ジュール・ジュールと呼んでいた。冷たい川を渡渉し、4,300mまで登り、氷河末端に着く。この付近で一番高い6,407m峰の南面の一角が望まれた。険しい岩稜がつづいている。いつの間にか、鈍よりとした空に変わっていた。ミンタカ川からは、すぐそこに、黒々とした中国との国境稜線と思われるのが望まれた。川は、きっとそこで大きく南に曲がっているのだろう。

帰路の途中、テント設営地の上の高台にあるムルクシの墓地を見に行く。ここは、土葬墓地でポコリ空いた穴から人骨も見られた。大きな岩に向かって一定方向に向けられ葬られている。

26日朝、雪に追い払われるように出発する。放牧から戻ってきたヤクを見ながらカラムダルチへ下る。ここで幸運なことに、トラクターに出会い、ミスガル村まで行く。

昨年にチベットのラサに順応無しで降り立った時、結構辛かったので、今回は、大雪山順応をして臨んだ。これは、結構効果があった（大雪山順応とは、北海道の大雪山＝標高2,000～2,200mに毎週のように1泊し、低高所順応をすること）。

今回は、アフガニスタン紛争の後のせいか、フンザの町では、外国人は我々ぐらいで、ものすごく静かであった。



▲薄氷張るミンタカ川を徒渉する辻野

ミスガル村及びその周辺について

(文責：寺沢 玲子)

ミスガル村の歴史

ミスガル村は、ミスガル川がフンザ川に注ぐ河口から約14km上流にあるミスガル渓谷及びその支流唯一の定住村である。川面から約200m程高い台地に広がり、約200戸1,500名の集落である(ただし、1,500名には村の外で働いている村人も含む)。村は二つの地区に分かれ、ミスガル・バインに120～130戸、それより上流のザキラバードに80戸あるとのこと。

いわゆるミスガル渓谷上流部は、古来キルギスタンの夏村地域であったため、上部ゴジャール地方からのワヒ族の人口は殆どなかった。しかし、フンザ王国がトルキスタンとの交戦のためミスガル渓谷を通過する都合上ミスガルに小屋掛けをし、若干の見張り役を常駐させていた。

1840年頃、フンザのミール、ガザンファール・アリ・ハーンはミスガル渓谷に恒久的な村を築くことを計画、ミスガルにゴジャール地方のグルキン村から選抜した村人を移住させたが、キルギスタンの度重なる襲撃に耐え切れず、数年後移住者達はミスガルへの定住を断念する。だが、パミールとの協定地帯の安定を図るためには、渓谷内の定住村の存在は不可避とばかり、今度はフンザの中心であるバルティットやハイデラバードの名家から屈強な者を選抜してミスガルへ移住させた。殆どの者が耐えられずにフンザに戻った中、唯一フンザのQurshot Kurz族出身のHaytoという男がミスガルの洞窟に住み込み、ミスガルの開拓に勤しんだ。ようやく収穫された穀物はミールに献上され、ミールはHaytoの労をねぎらって彼をミスガルの初代村長に任命、Haytoと共に村を築く為にフンザの主要部族から新たに22名の者を選抜し、ミスガルに定住した。初代定住者の名前は、現在のミスガル村の祖としてミスガル村では広く知られている。従ってミスガル村の歴史はまだ浅いが、23名の入植者によって開拓されたミスガル村は、一世紀半後の今日人口1,500余名の豊かな集落となっている。

以前からパミールとの交易路として利用されて

いたミスガル渓谷は、いわゆる英露のグレートゲーム時代には中央アジアのカシュガルとの連絡路として、頻繁に利用されることになる。ミスガル村には英国領インド最北端の集落として、1916年にはデリーとカシュガルとの連絡のため電信局が設置された。この建物は現在郵便局として利用されている。

我々日本人には1902年、大谷光瑞率いる第一次大谷探検隊がミンタカ峠を越えてフンザに至る途中の村としてその名が知られている。大谷光瑞と共にミンタカ峠を越えた本多恵隆(ほんだえりゅう)の、1991年に発見された日誌(恵隆の孫：本多隆成著書「大谷探検隊と本多恵隆」平凡社)によると、ミスガルからフンザに至る峡谷沿いの路は「世界稀有なる難路」で、谷に転落する者も少なくなかったらしい。「当夏仏国公使某は印度より来たり、戦慄して踵を回らせしと」「事務官云ふ、我に十数名の兵士あらば、露軍百万も恐るるに足らずと」。運動神経の良さを広く知られていた光瑞が無事越えた折には恵隆をして「無事の通過は、恐くは仏天の加護ならん」と言わしめている。彼らが4日間かけて決死の覚悟で攀じ越えたこの峡谷沿いのルートも、現在は左岸にジープ道が開通し、数時間でフンザに達することが出来る…。

ミスガル渓谷雑学

小王国が林立していた現在の北方地域は、19世紀半ば英国によりジャム・カシミール州に併合され、1947年印パ分離独立に際しパキスタンへの帰属を主張、英国の停戦表明後暫定的にパキスタン管轄下に置かれることになり、最終的な解決を見ないまま今日を迎えている。スリナガル経由の道路はスリナガルがインド領となったため利用出来ず、ギルギットからパキスタン平原部へ出る道路建設の必要に迫られ59年、インダス川沿いに道路建設が始まり、67年には中国との合同でギルギットとカシュガルを結ぶカラコルム・ハイウェイ(KKH)の建設が始まった。71年にフンジェラ峠越えが開通し、86年にはKKH全体が旅行者にも開放された。KKH開通以前は、キリック峠並びにミンタカ峠がアフガニスタンや中国とパキスタンを結ぶ主要ルートであった。KKH建設にあたり、両峠は(旧)ソ連に近すぎるという理由

から撰ばれず、フンジェラブ峠がルートとなったというのは有名な逸話である。

KKH開通後、ミスガル溪谷を通う者の数は激減、半世紀近くにわたる外国人立ち入り禁止も手伝って、ミスガル溪谷に生息するユキヒョウやブルーシープ、アイベックスなどの稀少野生動物は以前よりその数が増えたという。何とも皮肉な現象ではあるが、解禁後わずか4年間でこの地域へ入域する外国人トレッカーもかなりの数になっている。稀少動物の密漁者が増えてくる日もそう遠くないかも知れない。

* ミスガル村上流約7km地点のカラムダルチでミスガル溪谷は、ムルクシでミンタカ谷とキリック谷に分流するムルクシ溪谷と、アフガニスタン国境に続くディルソン溪谷とに分かれる。47年8月1日この地を通過したW・H・ティルマンは、当時最高所にある英国軍の前哨要塞・ケリーフォートについて「この日にギルギット行政管区がカシミールに委譲され、英国の統治が終わったのだが、砦を預かるインド人隊長は、最後のユニオン・ジャックを降ろすことをあまり急いではいないいらしかった」と記している。このケリーフォートの英国国旗は、47年8月14日のパキスタン独立後もしばらくの間掲げられていたとのことである。

* ミンタカ谷とキリック谷の合流点のムルクシには、かつてキルギスタンの集落があったが、その後フンザから入植したミスガル村の人々に追われ、ミスガルの夏村となった。一時ミスガルの村人が定住した時期もあったが、彼らも次第にミスガルへ移り住み、現在はまた夏村として利用されている。今回我々が発見？した一大墓地は、先に定住していたキルギス人達のものであった。大谷探検隊の記録にあるムルクシの定住者たちは、既にフンザからミスガルに定住していた村人たちの一部であったようである。

* ルーブジャンガルやムルクシの草原は、場所によっては草丈40cmを越えるほど豊富であるが、これはヤクの越冬用の食料とするため、この場所には夏の放牧はしないようにと村で取り決めをして草原を保護しているためとのこと。運搬手段はロバで、伝統的に馬は飼わない（しかし、我々はムルクシで馬も見ているが…）。消費した家畜の補

充は、主にディルソン峠経由でワハンから移入するが、ヤクはミンタカ峠経由で中国側からも移入することがある。ヤクや牛、羊といった類の家畜は各家庭の私有物ではなく数十家族ごとで共有し、ミスガル村全体で専業の25家族が有料で一夏の放牧を請け負うという。

余談ながら、そういう事情の“共有意識”からなのか、ポーター賃金はロバ数や人員数に関係なく、リーダー格の者が運搬する荷物の量分の賃金を一括で受取り、それを分配している。このような形式は他地域では経験がなかったのも、少々混乱したが、考えようによっては支払い側は楽である。ただし、いつもこのような方法なのかどうかは定かではないので、ポーターアレンジ時に確認する必要がある。

* ミスガル溪谷は国境地帯にあるため、1998年までは外国人立ち入り禁止区域であった。そのため我々一般人が眼にすることのできるこの溪谷周辺に関して記述のある資料は数少ない。比較的入手し易い日本語で読める資料としては、京極公雄訳「ザ・グレート・ゲームー内陸アジアをめぐる英露のスパイ合戦ー」中央公論社（Peter Hopkirk 著「THE GREAT GAME」）、広島三朗訳「オクサスとインダスの間に」論創社（Reginald C. F. Schomberg 著「BETWEEN THE OXUS AND THE INDUS」）などがある。グレートゲーム時代やその後のこの周辺をイメージする上での参考書としては解りやすい。残念なことに、故広島三朗氏の訳本は既に絶版となっているので古書店でなければ入手できそうにないが、原書はペーパーバック版も出版されているので、興味のおありの方は一読することをお奨めする。



▲ミスガルの郵便局

ロー・マントンの空、遥かなり(18)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

ブリクティ・サイル初登頂

高橋 照

5月17日は、ベース・キャンプに入ってから以来初めての快晴になった。この日の朝金子さんは9時頃デー村のボテの遊牧民と下山して行った。下山といってもベース・キャンプより八百メートルも、「聖地の扉」目指して急なガレ場を登って行くのだ。私はデーの村人達がどのようなルートを通って「聖地の扉」目指して登るのか、肉眼で見えなくなるまで見送っていた。だがガレ場を三分の一も登らない中に、小さくなって見失ってしまい、彼等のルートは途中から消え失せてしまった。金子さんは今夜はデー村に泊り、明日はタンゲ村泊りの予定である。リエゾンのピーク・バードルも金子さんにピッタリくっついて行った。おそらく、金子さんはジョムソムまでは不愉快な旅になるであろう。

この日、C1にいた佐久間、土谷、タシの三人は5,800mの地点にC2を作り進出したのである。そして、その翌日の18日、三人は午前6時にC2を出発し、まず左俣より6,150mのP4に初登頂した。そして、P4よりP5に連なる稜線づたいに登高し、正午を半時間程経過した頃、私達が仮に名付けたP5の頂上に立った。向こう側はもう山がないので、ブリクティ・サイルに間違いないとトランシーバーで伝えて来た。高度計は6,450mを指していると報告して来た。しかし、私達がネパール観光省より許可を貰っているブリクティ・サイルは6,720mである。この高さは中国と国境協定を締結した時、両国が合意の上で確認しオーソライズされている高度なのである。実際の高さと365mも差があるというのも納得が出来なかった。だとしたら、国境線にもっと高い山があるのだろうか。今の段階では全く五里霧中である。

P4とP5に初登頂した三人はBCに夕方6時

過ぎに下山して来た。その夜ベース・キャンプでP5が果たしてブリクティ・サイルなのかどうか検討したが、その頂上チベット（中国）との国境稜線上にあると思われるふしもあるので、6,455mの高さであるP5を一応ブリクティ・サイルということにした。遊牧民達はサッカリ・ダモダール・クンダより上のヒマールの向こう側には、ヒマールが全くないと証言しているので、高さが大幅に低いのが今のところ決定する材料はなかった。

中国とネパールの国境協定の基本条件は、水系によって決定されているものだと、カトマンドウの航空地図局の役人から聞いているが、私達が一応ブリクティ・サイルと考えるピークのチベット側の氷河が、そのままチベット高原に流れていれば、現在中国と国境協定を結んだライン上のブリクティ・サイルは、高さは違うがP5に間違いのないことになる。しかし、この氷河が180度転回してムスタン側に流れ、しかもその河がデー・チャン・コーラだったとしたら、一体どういうことになるのだろうか。佐久間の報告は正にその通りだったのだ。チベット側に向かって流れ落ちる広大な何本もの氷河は、サッカリ・ダモダール・クンダの東方で全部が合流し、180度の角度でムスタン側に屈曲して流れ込み、デー・チャン・コーラの源流になっているのだ。しかも、そのデー・チャン・コーラはチャランでカリガンダキに注いでいるのである。私達はこれから他のピークも登って同定する必要があった。

今日登頂したP5よりチベット側に流れ落ちる氷河がデー・チャン・コーラの源頭だとしたら、実際の国境はその氷河よりもっと東側の稜線でなければならないだろう。そうすると、ネパールは中国にかなり浸蝕されていることになり、極めて

重大な問題になることになる。

5月19日には遠藤と三笠の二人がP5（ブリクティ・サイル）の第二登に成功し、21日には、菊地隊長、TBSの寺田、新妻、そして隊員の浅見、土谷、キショールの6人全員が第三登に成功した。この時は四分の三インチのVTRを頂上まで持ち上げ録画撮りをしたので、恐らくヒマラヤ山頂でのVTR取材はこれが初めてであろう。

私達が一応P3と名付けたピークの奥に、ブリクティ・サイルと思われるP5よりも更に大きく高い山があることが判明したので、私達はその高いピークをP6と名付けた。P6がP5より高いピークだとしたら、それがブリクティ・サイルに違いない。ブリクティ・サイルだとしたら、その一番高い山のP6も国境稜線上になければならない。中国とネパールの両国はブリクティ・サイルを、ダモダール・ヒマールの最高峰であり、しかもそれが国境を画しているピークであると断定しているからである。

そして、佐久間と土谷の二人は、C3を作り5月25日にP6の攻撃を開始した。C3を朝の4時50分に出発した二人は、P3の登りにかかったが、これが意外に長い稜線で、鋭く氷が堅かった。8時45分にはP3の初登頂に成功した。このP3ですら私達がブリクティ・サイルと思っているP5より145mも高かった。

P3の下りは青氷で悪場の連続であった。乾燥地帯のヒマールは総じて雪の斜面より青氷の斜面の方が多い。二人はP3とP6のコルよりさらにP6に向かい前進した。P6の斜面も氷が堅くかなりの時間を費し、11時35分にP6の右肩についた。だが右肩よりも左肩の方が少し高いと思われたので、そのまま稜線を進み、20分後の11時55分に頂上に立った。高度計は6,700mを差しているので、観光省のいうブリクティ・サイル峰に高度からいったら間違はないようだ。しかし、地形的には、このピークのまだ奥にある6,580m峰（P7と仮称）とこのP6がデー・チャン・コーラの源頭氷河の源なので、地形的な面からはブリクティ・サイルと断定するわけにはいかなかった。無線で佐久間に頂上よりの地形を沢山写真に撮るように菊地君が命じてあるので、このブリクティ・

サイルの「頂上論」は、いずれ日本に帰ったあと、ゆっくり同定することになるだろう。しかし、観光省への報告は、私達が最初に登ったP5をブリクティ・サイルとして報告することにしたのである。いづれにしても、ブリクティ・サイルを求めて、4つの六千メートル峰の初登頂に成功したわけである。幻の山ブリクティ・サイルとは一体どのピークが本当なのだろうか。果たして本当に存在している山なのか。今の私達には同定することが出来ない。ことによったら、チベット、ムスタン、マナンのジャンクション・ピークがもっと東の方にあるかもしれない。

P6は高度とネパールの行政区画から見て、一応ブリクティ・サイルと決定づけることも考えられるが、もしそうだとしたら、P6とP7を源頭氷河とするデー・チャン・コーラは、中国領に流れ落ちる河ということになるので、私達には納得出来なかった。

私はダモダール・ヒマールの最高峰と思われるP6の登頂の二日前に、C1にいる菊地君と交信を交わした時、彼より一つの依頼を受けた。それは、5月25日には一応登山活動のメドがつくと思うので、BCよりのキャラバン・ルートについてジョムソムのCDO宛てに、チャラン経由で帰る許可を取りつきたいから、その旨手紙に書いてメール・ランナーを送ってくれという依頼であった。私は往路二度もアクシデントがあって、ポーター二人が凍死寸前にまでに追い込んだ経緯を克明に書いて、ポーター達の安全確保のため、帰路をチャランよりの本街道を通して帰れるよう、許可を求めるペティションの原稿を作り、それをキショールに上手な英語で書き直して貰い、翌日の朝一番でメール・ランナーをジョムソムに出した。うるさいリエゾンも、今は金子さんのお目付役で、ジョムソムに行き、まだ戻ってくるには2、3日の間があるので手筈は順調であった。時間的にはギリギリだったがCDOよりなんらかの反応があることを願った。

P6に登頂した25日には、隊員とポーター全員で撤収し、夜の10時近く全員ベース・キャンプに終結し、ブリクティ・サイルの登山活動は一応終結したのであった。

翌日は一応ブリクティ・サイルの登山活動は終わったので休養日としたが、まだブリクティ・サイル山群の完全な解明は未完成で、むしろ謎の部分が余りにも多過ぎるという結論に達したのである。そこで、残り少ない日程の中で、可能な限りの調査活動をする事になり、ベース・キャンプの反対側、つまりブリクティ・サイル山群の北側であるデー・チャン・コーラの源頭に達するルートの調査を行う事になった。それにはどうしてもサッカリ・ダモダール・クンダ即ち「本物のダモダールの聖地」まで行く必要があった。

5月27日登攀隊全員と、どうしてもサッカリ・ダモダール・クンダの聖地巡礼に行きたいという昨日戻って来たヒンドゥ教徒のリエゾンと、仏教徒（ラマ教）のシェルパ・ポーター数人が早朝ベース・キャンプを出発して行った。その中、佐久間、三笠、遠藤、浅見の四人は天幕を持って、サッカリ・ダモダール・クンダに泊り手分けして、デー・チャン・コーラ源頭の調査を行う予定であった。そして、他の隊員、リエゾン、ポーターなどは、かなり強行軍ではあるが、その日のうちにベース・キャンプに戻る事になった。

この日、ジョイント・メンバーのキショール・バッタライとタシ・ザンブーの二人は、ロー・マントンにデー村経由で出発した。そして4、5日後にはチュクサンかジョムソムで私達に合流する手筈になっていた。

このところ、10日以上も連日快晴続きであったので、ブリクティ・サイル北面の調査には極めて好都合である。TBSスタッフと私はBCに止まり、ことの推移を無線で菊地君と交信する事になった。以下、交信による記録を簡単に述べることにしよう。

11時の交信では、全員BC前の大障壁より派生している尾根の一角を乗り越し、デー・チャン・コーラの左岸岩壁帯をトラバースしていた。岩が脆く落石の多い極めて危険な悪場の連続だといって来た。正午には、尚それ以上に落石と雪崩の頻発する悪絶無双の地帯を進んでいた。菊地君はブリクティ登山活動よりずっと神経を使うと交信してよこした。現在岩尾根を二つ越して、ベース・キャンプの丁度真裏の5,000m地点にいるといっ

▼BC付近のヤクとムスタン・ヒマール



て来た。まだまだ、サッカリ・ダモダール・クンダへの道は長くその姿すら見せない。あと一つか二つ尾根を越えれば、サッカリ・ダモダール・クンダの見える地点まで到達出来そうだが、これよりどのくらい時間がかかるか判らないと連絡して来た。2時頃になり、この5,000mの地点からはブリクティ・サイルが良く見えリエゾンやポーター達は、どうしてもサッカリ・ダモダール・クンダの聖地まで行くというので、菊地君と土谷の二人はその地点に止まって付近の地形を調べ、佐久間、遠藤、三笠、浅見はサッカリ・ダモダール・クンダの手前に天幕を張って、デー・チャン・コーラ兩岸の地形を調査することになった。午後3時になりサッカリ・ダモダール・クンダに向ったリエゾンやポーター達が現在地戻って来るには、4時を過ぎると思うし、又、4時にここを出発してもベース・キャンプに戻ると夜の8時頃になるだろうといってきた。菊地君は往きの道が危険なルートだったので、午後3時デー・チャン・コーラ本流沿いの谷のルートの道を下り始めた。デー・チャン・コーラの水量が多いので、今後コーラ沿いか、山腹道かどちらかの道をとろうと思うが、今のところ全く不明である。しかしサッカリ・ダモダール・クンダのキャンプと5時の交信があるまでには、どちらかにするか決定したいと交信して来た。

5時の交信では、菊地君はサッカリ・ダモダール・クンダの佐久間達のキャンプとベース・キャンプを結ぶ距離の中間あたりの尾根を登っていた。リエゾンやポーター達は谷の道を下っている筈だが、まだ姿は見えなかった。デー・チャン・コーラは物凄く水量が多いが、菊地君はこれより、3、

▼ナッカリ・ダモダール・クンダにきた巡礼徒



4時間の間にはBCに帰幕出来そうだが、リエゾンとポーター達は1時間以上遅れるだろうと言って来た。落石の頻発した急なガレ場の山腹道も、夕方の6時になった現在では、気温が低くなったせいか、不思議なくらい落石はピツリ止まっていた。そして6時10分にはリエゾン・グループがデー・チャン・コーラの谷底に見え出したが、水量が多いのでやはり山腹道に取りつき始めたようだったので、少なくとも菊地君よりは2時間半は遅れていた。したがって、菊地君は夜の8時頃にはベース・キャンプに戻れそうだが、リエゾン達は夜の10時半か11時には確実になりそうだった。

夜の8時20分、菊地君と土谷の二人はベース・キャンプに戻って来た。彼の話ではここより2時間位先に、カムバの監視所の石造りの建物があったそうだ。カムバは、ゴーマル・ゴート・カムバ・ケームの駐屯地より、メ・ラを越えてナッカリ・ダモダール・クンダよりサッカリ・ダモダール・クンダまでの地域をパトロールして、中国軍がチベット側より入って来ないように備えていたということである。その夜、リエゾンとポーター達は夜の10時40分頃ベース・キャンプに帰って来た。

翌日の5月28日には、サッカリ・ダモダール・クンダに一泊した佐久間、遠藤、三笠、浅見の4人も夕方遅く帰って来て、この山域に於ける登山活動は全部終わったのである。あとは、今迄の登山活動や調査活動に基いて、少しでも実際に近い地図を作成する義務が私達に課せられていた。いずれ日本に帰った上で、各自が討論して実情に近い地形図が出来上がることであろう。

昨日の夕方のことであった。コックのニマが私

に、インド人の巡礼徒が10人ばかりさっきタンゲ村のボテに案内させて、サッカリ・ダモダール・クンダにやって来たという話を聞いた。それが今日になって、ベース・キャンプより下の聖池のそばに野営していることが判った。一晩中寒くて眠れなかったのだろう。朝早くより聖池のそば二ヶ所から焚火の煙が上っていた。

明日は永く住み慣れたナッカリ・ダモダール・クンダのベース・キャンプ撤収の日である。私達は全員で撤収準備を始めていた。今朝は早くからヤクの群が天幕のすぐそばにまでやって来て草を喰んでいた。天幕場付近は人が沢山いるので、今まであまりヤク達は寄りつかなかったのだが、それだけに草を喰まれていなかった。この10日余りの晴天続きで、ベース・キャンプ付近もすっかり春らしく、毎日暖い陽光が降りそそいでいた。そのためか、若草も5センチ余りにも育って来たので、やわらかな牧草を求めるヤク達が沢山集まって来たのである。

丁度その頃、聖池のほとりに露營していたインド人の巡礼徒が一人、二人と私達のベース・キャンプに向って上って来た。一人一人勘定していくと、全部で10名の巡礼徒で、そのうち中年の女性が一人含まれていた。彼等は、白い布や毛布を頭からかぶり、私達の天幕のまわりに座り込んだ。顔から判断して、バウカチュツトリーと思われた。

彼等の話によると、昨日サッカリ・ダモダール・クンダに向って巡礼を始めたが、少し行ったところで足元の岩が崩れるので前進出来ず、暗くなってこの下の聖池に戻って来たのだそうであった。そして、これから再び、サッカリ・ダモダール・クンダの聖地に何日かかっても良いから辿り着きたいといていた。私は今更ながらヒンドゥ教徒の信仰の力のすさまじさに驚くとともに、その敬虔さにうたれた。彼等と話をして判ったことだが、彼等はインドから来たのではなく、バグルン（カリガンダキの下流で、ドゥラギリ・アンチャル<ゾーン>の主都）の近くの農民のバウ（ブラミン）とチュツトリーのヒンドゥ教徒だった。

神秘の地チベットへ、幻の花「ブルーポピー」を見に行こう！

HAJニンチン・カンサ トレッキング隊員募集

HAJがこれまで過去4回サマーキャンプを実施したニンチン・カンサBCへのトレッキングです。拉薩（ラサ）の街を俯瞰したり、チベット仏教の聖なる湖ヤムドクツォを眺望し、夏の高原をトレックしながら幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しめます。

現時点でフライトスケジュールが未定のため日程は変更になる公算が大了。

○料金：435,000円 ○募集人員：15名限定（最少催行人員10名） 定員になり次第〆切

○HAJのツアーリーダー同行 ○問い合わせ先：HAJ事務局

	月・日	都 市 名	交通機関	摘 要
1	7月18日 (日)	成田～成都	CA452	空路、四川省の成都へ。〈成都ホテル〉
2	7月19日 (月)	成都～拉薩	CA4401	空路、チベット自治区の中心地拉薩へ。 〈拉薩／ホテル〉
3	7月20日 (火)	拉薩	専用車	終日、ポタラ宮、大昭寺、八角街などの観光。 〈拉薩／ホテル〉
4	7月21日 (水)	拉薩	トレッキング	拉薩近郊のブンバ・リ(4200m)登山で高所順応。 〈拉薩／ホテル〉
5	7月22日 (木)	拉薩～ランカーズ	専用車	専用車にてランカーズへ。天候が良ければ、途中のカンパ・ラからは青く美しいヤムドク・ツォやニンチン・カンサの雄大な景色が眺められます。〈ランカーズ／招待所〉
6	7月23日 (金)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね4700m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
7	7月24日 (土)	ランカーズ	トレッキング	高所順応を兼ね5000m付近までトレッキング。〈ランカーズ／招待所〉
8	7月25日 (日)	ランカーズ～マヨン村～ニンチン・カンサBC	専用車、 トレッキング	専用車にてカロ・ラ(5045m)を越え、マヨン村へ。マヨン村からニンチン・カンサBCまでのトレッキング（約3時間）。〈ニンチン・カンサBC／テント泊〉
9	7月26日 (月)	ニンチン・カンサBC	トレッキング	ニンチン・カンサBC付近のトレッキングとブルーポピーなどの高山植物の観察 〈BC／テント泊〉
10	7月27日 (火)	ニンチン・カンサBC～マヨン村～拉薩	トレッキング、 専用車	往路を拉薩まで戻ります。〈拉薩／ホテル泊〉
11	7月28日 (水)	拉薩～成都	CA4402	国内線にて成都まで戻ります。〈成都／ホテル泊〉
12	7月29日 (木)	成都	専用車	終日、成都市内観光とショッピング。 〈成都／ホテル泊〉
13	7月30日 (金)	成都～成田	CA451	空路帰国の途へ。到着後解散。

ヒマラヤ・ニュース

《ネパール》

チョラツェ(6,440m)で遭難

大阪凍稜会とカランクルンが合同でチョラツェに派遣した登山隊(宮本俊浩隊長(43)ら2名)は、10月7日午前9時30分、タウツェとチョラツェのCOL(5,700m)に到着。その後、榊原義夫(45)が上部を目指して登攀中、岩雪崩が発生し榊原が転落。打撲しているが意識はありヘリコプターを呼ぶように宮本に話した。宮本は単身下降しBCから伝令を走らせた。8日午後6時頃、宮本が再び榊原のいた場所に戻るとすでに死亡していた。事故後短時間で死亡したものと思われる。遺体は後日収容された。

アンナプルナⅢ峰(7,555m)登頂

英国のイアン・パーネル、ケントン・クール、アメリカのジョン・ヴァルゴの3名が、11月にアンナプルナⅢ峰の南東稜からアルパインスタイルで初登攀した。

3人は昨年秋にスロベニア隊が張った2,000メートルに及ぶ固定ロープの恩恵に与った。

ヒムルン・ヒマール(7,126m)登頂

クリス・ヴァンティキス隊長ら12人のベルギー隊が挑み、ノーマルルートから隊員6名とシェルパ2名が登頂した。

ネパール 2003/秋季概況

2003年秋、40隊の164人が17の頂を踏む事が出来た。この他に高所ポーター52名も登頂した。

18カ国から来た76の登山隊490名(ネパール隊員6名を含む)が36峰の登山許可を取得。登山料収入は2,160万ルピーにのぼった。現在まだ、ローツェとテンカンポチュで登山が行われている。エベレストにはアメリカ隊が挑戦したが登頂はなかった。概ね今シーズンは昨年秋に比べて恵まれていた。

国別では14隊がフランス、アメリカ13隊、英国7隊、日本4隊、オーストラリア4隊、韓国、スペイン、オーストリア、カナダ、チェコスロバキア、ロシア、イタリアが3隊、ベルギー、スイスが2隊、ポーランド、メキシコ、オランダが1隊となっている。アマ・ダブラムには22隊が許可を得た。

事故はアマ・ダブラムで1名死亡、ローツェ・シャルでは2名(韓国)が行方不明。ヒムジュンでは1名死亡。ラクシャウライ(Rakshaurai)でも2名が死亡した。日本人2名とドイツ人1名の遺体は回収されたが、韓国人2名とフランスとネパール1名づつは未だ不明である。

ネパール山岳協会は443隊2,292人に対して6,500m未満の33のピークの許可を与えた。

ネパール政府は326の山を登山隊にオープンしている。それとは別にNMAは33のピークの許可を与えている。秋季の登山シーズンは9月の第3週から12月初旬である。

(情報提供:大西 保)

《アフガニスタン》

ノシャック(7,492m)登頂

ヒマラヤ381号でお伝えしたアフガニスタンの最高峰ノシャックに挑んだ国際登山隊は、1978年以来25年ぶりに西稜から登頂に成功した。登頂者は7月27日にイタリアのF・ステファニ、8月2日にイタリア、フランス、スロベニアの隊員が各1名で合計4名が登頂。

トピックス

日山協第42回海外登山技術研究会

期日:平成16年2月21日(土)~22日(日)

場所:八王子大学セミナーハウス

〒192-0372 八王子市下柚木1987-1

TEL 0426-76-8511

費用:12,000円(1泊3食・資料代含む)1日の参加希望者の一般参加者は5,000円(資料代含

む)懇親会費別途 3,000円

内容:

21日〈韓国登山界を語る〉

(ゲスト) 韓国登山家: ナム・ソンウ氏

(ゲスト) 韓国登山家: オム・ホンギル

パク・ヨンソク両氏

22日 2003年日本隊の事故報告

「パスー峰」日本ヒマラヤ協会

「ヒムルン・ヒマール」パーバリアンクラブ

「チョラツェ」カランクルン

2003年登山隊報告／ヒマラヤ各国最新情報

問合せ先: 〒150-8050 渋谷区神南 1-1-1

岸記念体育館 (社)日本山岳協会

TEL: 03-3481-2396 Fax: 03-3481-2395

<http://www.jma-sangaku.or.jp>

Mail: info@jma-sangaku.or.jp

HAJ華甲望年会開催される

12月13日(土)午後7時から、東京、東池袋の
「かんぽヘルスプラザ東京」において、第5回目と

なる『HAJ華甲望年会』が開催された。

尾形好雄常務理事の司会の下、冒頭、パスー峰で遭難した高橋敏雄隊員、ヒムルン・ヒマールで遭難した野沢井歩専務理事に黙祷を捧げた。

山森欣一理事長の挨拶の後、パスー峰登山隊の概要報告が酒井國光隊長からあり、北海道から駆けつけた佐藤英樹登攀隊長がスライドで登攀の様子を報告した。

次いで本年めでたく還暦を迎えられた梅澤佳子(神奈川)、前島孝夫(長野)、野口信彦(東京)、佐藤邦彦(福島)、松元邦夫(東京)、熊村秀人(大阪)の6氏にお祝いの品2点が贈られ、それぞれがショート・スピーチを行った。

ご来賓を代表されて西本武志氏(日本勤労者山岳連盟理事長)からご祝辞があり、ナンダ・カートトレッキングから帰国されて間もない坂口三郎氏(日本山岳協会前会長)の乾杯のご発声で祝宴に入った。

午後9時過ぎ、古関正雄常務理事が中締めを行い散会した。出席者55名。

東京集会のお知らせ

日時 1月26日(月)午後7時～

内容 新年会

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

事務局日誌(12月)

- 2日(火) 山岳4団体「登山調査用紙実務者会議」日程調整についてFAX
サマーキャンプ募集要項12通発送
- 3日(水) 督永忠子「オバハンの出版を祝う会」
於: 目黒さつき会館(山森)
- 10日(水) ヒマラヤ386号発送
「新日本ヒマラヤ会議」案内状を高体連加盟216校に発送
- 13日(土) 第5回HAJ華甲望年会 於: かんぽヘルスプラザ東京(55名)
- 14日(日) 日山協主催NMA会長歓迎会
於: ランドマーク(山森)
- 15日(月) 山岳4団体「登山調査用紙実務者会議」於: HAJルーム(山森)
- 25日(木) 東京集会(15名)
- 26日(金) トンルーさよならパーティ(山森)

ヒマラヤ No.387(2月号)

平成16年1月10日印刷 16年2月1日発行

発行人 山森 欣一

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

■大阪営業所/〒530-0026

岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

**最新
クライミング技術**

ジム・グレインのフリークライミングからマルチピッチ、アルパイン・ビッグウォールまで、すべてのロッククライマーに必要のテクニックを網羅する。クライミングとは、単に岩を登るだけでなく、その意味や歴史、安全法までを徹底して解説。実践的なクライミングのヒント、心構えなども細かくアドバイス。

菊地敏之 著
1600円

**山小屋の主人の
炉端話**

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一話の取って置きのお話。

工藤隆雄 著
1500円

**マレーシア・ブルネー・インドネシア
ザ・ルーツ**

北アルプス全巻を代表する77のルートをあかりやすく解説したルーツ案内書。

廣川健太郎 著
2500円

山の気象と救急法

山の気象と遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に解説。

飯田睦治郎 著
1359円

記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が致する山はどれか。

石井光造 著
1300円

山のメモ帖

「登山」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のフナツキを深め、安全登山の指針となる冊。

岳人編集部編
1400円

中高年の雪山入門

低山から夢のヒマラヤまで…。トフルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。

福島正明 著
1600円

**すぐ役立つ
新・山の雑学ノート・第1集**

山での話題が盛りだくさんの数だけではない。奥が深い雑学が登山をより楽しく安全にしてくれる。

岳人編集部編
1400円

**女性ガイドの
しなやか登山術**

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもつと素敵になると呼びかける女性登山ガイドのユニークな登山講座。

樋口英子 著
1500円

新・山靴の音

遠隔をわがえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著
1262円

**中高年登山
なんでも百科**

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著
1500円

**登山の
運動生理学百科**

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」という疑問など、高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著
2000円

山書散策

今まで数多く発刊された山書。何を読むべきか、そんな時の指針として「登山」連載時から好評。

河村正之 著
1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004